

「野生生物と社会」学会と民間事業体のあり方

文 上田 剛平 株式会社野生鳥獣対策連携センター／「野生生物と社会」学会理事



いきなり私事で恐縮ですが、13年間勤めた兵庫県を昨年度末で退職し、今年度から株式会社野生鳥獣対策連携センターに移籍しました。兵庫県在職中に身に付けた知見や技術を生かし、野生鳥獣問題と戦う全国の人々のお役に立ちたいと考えたからです。

おかげさまで私の目論見通り、今まさにイノシシによる被害が深刻化しつつある最前線で仕事をしています。イノシシ被害の最前線では、電気柵もまだ十分に行き渡っておらず、毎晩やってくるイノシシたちに、なす術もなく作物を食い尽くされている光景が、あちこちで見られます（写真）。対策支援の現場では、イノシシ対策の歴史が長い地域と同じ失敗を繰り返さないよう、地域住民にアドバイスをしています。

民間事業体として、このような現場で地域住民や行政の方々と連携し、問題解決に取り組んでいるのですが、そういったアプローチに「野生生物と社会」学会がどのように関わり、どのような役割を担うことができるのか。このことは、多様な担い手を巻き込み、共に成長し、社会が抱える問題の解決に貢献していこうとする「野生生物と社会」学会の将来を描くうえで、非常に重要な課題です。これからは民間事業体の立場からこの学会の新たな可能性を模索し、具現化していきたいと考えています。



イノシシに全滅させられた水稲（石川県能登町にて）